福島・飯舘　土はぎ取り 基準の3倍に　NPO検証

田んぼ除染 耕土喪失

覆土の山砂厚さ15センチ

農家「復田できるのか」

福島第1原発事故後の除染作業が進む福島県飯舘村で、環境省の委託で村が除染工事を発注した田んぼが、最大で厚さ15センチもの山砂で覆土されていたことが、NPOの検証で分かった。環境省の農地の汚染土はぎ取りの基準は「約5センチ」だが、約3倍の耕土が失われたことになる。村内での農地除染は今後本格化するが、再生の具体策はまだない。

除染された田んぼで採られた土。写真のサンプルは、山砂の厚さが約15センチ(容器の上半分)＝8月30日、福島県飯舘村須萱

調査は8月下旬、村の農家と研究者らでつくるNPO法人「ふくしま再生の会」が同村須萱地区で行った。山間の田んぼ約100枚の除染を村が代行発注し、昨年1月から1年かけて業者が表土をはぎ、山砂を覆土した。

同会は除染前、現地の放射線量や土壌の放射性物質の濃度を測っており、その事後検証だった。

1回目の調査は3枚の田んぼの5地点で、長さ15センチの簡型容器を土に刺してサンプルを採った。分析した結果、このうち3地点のサンプルがすべて山砂だった。

同会は「他の田んぼでも5センチ以上の表土がはぎ取られた可能性がある」(田尾陽一理事長)と再調査をし、計20枚で深さ30センチまで土を採取した。分析中だが、「山砂は平均十数センチ」とみている。

村除染推進課は過度のはぎ取りを認め「5センチの基準を守るのは当然だが、現場で(はぎ取りの)重機を操縦する作業員の腕によって差が出ているのは否めない」と話す。

環境省による村内の農地除染の進捗(しんちょく)は、8月末現在で計140ヘクタール(計画の6%)。完了箇所は山砂に覆われ、覆土の実情は未検証だ。「引き渡されても、山砂からどうやって復田できるのか」と戸惑う農家が多い。

「基準通りに土をはぐ新機材が配備され、作業は改善できる」と同課は話すが、農地再生策は後手に回っている。「環境省が地力回復の工法を検討中で、来年度は除染と併せて発注できる」という。

調査に参加した溝口勝東大大学院教授(土壌物理学)は「山砂に埋もれた田んぼも、改良技術と時間があれば再生は可能だ。心配は農家側の意欲。応援する仕組みをどう作れるかだ」と話す。

わう河川敷＝12日、仙台市青葉区の広瀬川牛越橋付近

芋煮の秋

仙台・広瀬川河川敷

東北地方の広い範囲で爽やかな青空が広がった12日、仙台市を流れる広瀬川の河川敷は芋煮会を楽しむ家族連れや学生グループでにぎわった。

青葉区の牛越橋付近の河川敷では、3連休の中日とあって300人ほどが陣取った。河原の石で即席のかまどがあちこちに組まれ、大鍋がかけられると、食欲をそそる湯気が秋晴れの空に立ち上った。

職場の同僚と鍋を囲んでいた青葉区の会社員菅野公仁さん(46)は「楽しく手軽に集まれる芋煮は、なくてはならない行事ですね」とくつろいだ様子だった。

仙台管区気象台によると仙台の最高気温は19・1度で平年並み。台風19号の影響で、東北地方は13日午後には雨が降り始め、同日夜遅くから14日にかけて大荒れとなる見通し。